

1.3 「HWH 歴史の傷を癒す」プログラムの基礎と応用



アルマンド・ボルカス
(CIIS 准教授、ドラマセラピスト)

1. 「HWH 歴史の傷を癒す」について

第2次大戦の終結から50年経った1995年、私はアウシュビッツ強制収容所に巡礼をしました。私の両親はそこで2年以上の間収容されていました。第10ブロックでは、かのクローバーとメンゲレによって避妊実験が私の母も含めたユダヤ女性に行われました。また父が働いていたところも見に行きました。そこでは人々の衣服や靴や持ち物を、労働や死へと送られる人々からはぎ取る仕事が行われていました。ガス室も訪れました。

ビルケナウはアウシュビッツに隣接する収容所で、私はいわゆる「火葬所」地域を歩き回りました。終戦間際には、多くの列車がユダヤ人を虐殺のために運び込み、ガス室は24時間稼働していました。火葬場では死体の処理が追いつかず、ナチスは収容所の入所者に死体を山積みにし、火をつけさせました。死体は何週間も燃え続け、灰は近くの池に埋められたり、周辺地域にまかれたりしました。

1995年の夏、かつての焼き場のあたりを歩いていて私が心を打たれたのは、その場所に見たこともないほど美しい野草が咲き誇っていたことでした。自然はあれほど怖い行いさえ美へと変えていくことができることに感動しました。私が自然の奥深くに見いだした変容の原理こそ、心理療法家でありドラマセラピストである私の仕事の導きの原理となっています。

第2次大戦でレジスタンスとして戦い、アウシュビッツを生き延びたユダヤ人の息子である私が、自らの過去と和解する旅で理解しようとしたのは、国家と文化が加害と被害、そして集団のトラウマの遺産をいかにして統合するかでした。どのようにして集団のトラウマが世代を越えて受け継がれるかを理解し

ようとなりました。また心理療法家として芸術に根ざしたアプローチで文化間の対立を変容させる方法を開発してきました。そこでは、集団的トラウマが主要な役割を果たしています。私はこのワークを「HWH 歴史の傷を癒す」と名付けました。

「HWH 歴史の傷を癒す」は、ドラマセラピーのプロセスとして始まりました。そこでは劇場の技法を使って二つの文化からの参加者が、対立や歴史的トラウマの共通の遺産と向き合います。私は1989年、このプロセスを、ホロコーストを生き抜いたユダヤ人とナチスの子どもたちとのワークで初めて用いました。それ以来、他の多くの対立している文化の人々に用いてきました。最近ではイスラエルとパレスチナ、アルメニアとトルコの集団虐殺の遺産、日本と中国、日本と韓国の第二次大戦の遺産、スリランカ内戦後のタミール人とシンハラ人、そして今年の一にはレバノンで内戦に巻き込まれた党派の対立などと取り組んできました。

「HWH 歴史の傷を癒す」の方法は、関連する対象領域へと応用され発展してきました。まず、特定のトラウマやトラウマを経験した一つの集団や国家を対象を絞るワークショップがあります。例えば、ホロコーストを生き抜いたユダヤ人の子孫たち、大量虐殺を受け継ぐネィティブアメリカン、広島原爆の生き残りや原爆の心理的・精神的・感情的影響を被る第二世代、第三世代などです。

二つ目は、もっと一般的なワークショップで、異なる文化の人々が自由に参加し、それぞれの歴史的トラウマの遺産を探っていきます。こうしたワークショップでは、ベトナム戦争の退役軍人や、奴隷制の重荷を背負うアフリカ系アメリカ人、ナチスの過去の重荷を感じるドイツ人などが対象です。

三つ目は、個人や夫婦、家族との心理療法のセッションで、歴史のトラウマが明らかな問題である人たちです。私が現在心理療法家として関わっているある男性の例がこれにあてはまります。彼は、重度の不安感と抑鬱症状に悩まされていますが、その症状をたどっていくとホロコーストを生き抜いた彼の母親の経験にまで行き着きました。彼女は強制収容所で家族をすべて失い、フランスで身を隠しながら、いつか見つかって殺されるのを恐れて子ども時代を過ごしました。

四つ目は、数日を要するもので、対立やトラウマの遺産を共有する二つの文化の参加者が一緒になるものです。「南京を想い起こす」プロジェクトはこうした応用の一例です。

五つ目は、何ヶ月もかけて演劇の作品を創造するグループで、自分たちの対立や集団的トラウマのテーマを扱います。この演劇の作品は、一般に公開されます。これまで何度か行ってきましたが、ホロコーストの生き残りと第三帝国の子孫が、公開でホロコーストと第二次大戦の追悼の儀式を一緒に創造します。

最後に、プレイバックシアターの公演を集中的な「HWH 歴史の傷を癒す」ワークショップの後に行い、参加者と聴衆からのボランティアが歴史的トラウマに関連する個人的な物語を分かち合うこともできます。昨年10月に南京でこれを行いました。

2. 理論と原理

「HWH 歴史の傷を癒す」はいくつかの前提に基づいていますが、それを端的にまとめてみます。

- ①一つ目の前提は、集団的なトラウマは心理的な状態としてどのようなグループにも見られ、社会全体に影響する可能性があるというものです。米国での例として、9.11 やカトリーナ台風、ベトナム戦争などがあります。日本では、広島と長崎の原爆、地震と津波による破壊などがその例でしょう。集団的なトラウマの影響は、イメージや物語、感覚的記憶、親や教師やメディアを通して伝えられる、言葉になったりならなかったりするメッセージの形で、魂のレベルで伝達されます。最終的にはこのプロセスは集団的な物語へと進化していき、無意識のうちにじわっと染み込み、個人や集団の文化的国家的アイデンティティに影響を与えます。
- ②二つ目の前提は、世代を越えたトラウマの伝達です。米国のアフリカ系アメリカ人、ネイティブアメリカンなどの文化で明らかに見られる現象で、奴隷制や大量虐殺の破壊的な影響が、何世紀たっても明らかに続いています。歴史的なトラウマはまた、親から子どもへと世代を越えて伝達されます。例えば、父親のアルコール依存症や抑鬱症は未解決のベトナム戦争のPTSD に直接結びつくものかもしれないのに、トラウマの歴史的集団的側

面が明らかになることは滅多にありません。村本先生の研究が明らかにしているように、日本で見られる夫婦間の虐待のケースには、第二次大戦から戻った兵士たちが被った戦争トラウマの未解決の PTSD の結果かもしれないものがあります。同じような現象がドイツでも起こっていました。歴史的トラウマのそうした遺産を受け継ぐ者は、両親のトラウマを表現されない悲嘆の重荷として、多くの場合意識で気づかないまま受け取っています。

- ③「HWH 歴史の傷を癒す」のモデルの中心にあるもう一つの前提は、歴史的トラウマは否定的な影響を文化的国家的アイデンティティや自尊心に与える可能性があるということです。人間は本質的にある集団に属する存在であり、自分が所属する集団を肯定的に感じる必要があります。国家や文化に対するこうした誇りの感情が、戦争のトラウマや屈辱、敗北あるいは支配の歴史によって打ち砕かれると、集団的自己愛に否定的な影響を与え、内面化された抑圧の形をとります。それによって、個人が自分自身や自分の文化をどのように見るか、価値を置くかに影響を与えます。
- ④四つ目の前提として、「HWH 歴史の傷を癒す」では、私たちの誰もが潜在的な加害者となる可能性をもっており、人間なら誰でも状況によっては、人間性を喪失し残虐になるという見方をします。
- ⑤五つ目の前提は、どのような文化間の対立においても、永遠の政治的な解決のためには、人間の欲求、感情、無意識の衝動を理解し、それらを考慮に入れることが必要だということです。また、私たちの中の、報復や憎悪や嫉妬、貪欲、人種差別、権威への完全な服従への衝動をどのようにして手はずければいいのかも理解しなければなりません。
- ⑥自分の文化を代表して参加する人々とワークをすることで、集団的社会的トラウマに治療的に介入することを追求します。「歴史の傷を癒す」は、対立に政治的ではなく心理的にアプローチしますが、対立する集団が感情的な領域を通り抜け和解へと至る道行きを提供します。ですから、このアプローチは、一種の社会活動でもあります。

3. 治療的目的

このワークには五つの治療的目的があります。まず第一に、文化的国家的アイデンティティを明らかにし、それを解体することです。参加者をサポートして、自らの文化的アイデンティティを振り返り、自尊心を抱くことを妨げるものに取り組むという目的を明らかにしていきます。一人一人の構築されたアイデンティティには、集団的物語の様々な断片を抱える亀裂があります。その人を形作る感情、連想、感覚的記憶や感情的記憶がこうした解体のプロセスで浮上してきます。

ワークショップの参加者は、意識的無意識的に家族が受け継いできたものを明らかにする役割を担っていますが、時には、集団のトラウマが表面にでない場合もあります。同化作用やトラウマを受けた両親の沈黙により、家族の遺産が参加者の意識から隠されているからです。私の目的は参加者が受け継いでいる加害や被害の集団的な物語を明らかにし、より生産的で肯定的な形でそうした遺産を統合するのを手助けすることです。

二つ目のゴールは、文化間の対立の解決や文化間コミュニケーションのあり方を教えることです。「他者」に語りかけること自体がタブーであることはよくあることです。対立する文化の出身者が互いをステレオタイプで人間ではなく悪魔のように捉えることはよくあり、たんに話をするだけでも重要な癒しのステップになります。

他の文化への正しい理解や感情的政治的立場への共感が欠落していることもあります。自分のことをありのままに話したり、「歴史の傷を癒す」の楽しい側面によって、対立するグループ間の緊張が一時的に緩み、敵を人間として見ることができるようになります。

三つ目のゴールは、参加者が個人的集団的な悲しみや嘆きに深く入りこみ体験するのを手助けすることです。「歴史の傷を癒す」のプロセスを経験することで触れることのできる、「哀しみの井戸」があります。たとえワークショップの最初では認められなくても、私はそれがあるのをいつも心に留めています。参加者の両親や祖父母、先祖や文化全体の集団的な悲嘆は、私たちが一緒に集まるといふまさにその行為によって暗示されているのです。こうした悲嘆は、被害や加害、あるいはその両方に関連しているかもしれません。

トラウマを受けたグループはそれぞれ、この継承してきた痛みを独自で特別なものとして経験する必要があります。対立しているグループにこうした次元を付け加えることで、加害者と被害者が一緒に悲しみ、深いカタルシスの効果がみられます。参加者は自らの文化の代表者としてこうした集団的悲嘆に形を与え、それを表現する機会を与えられます。原則的にはこうした痛みが十分に悲しまれるまで、そうした遺産は次の世代へと引き継がれ続けるでしょう。

四つ目のゴールは、共感の文化を創造することです。「歴史の傷を癒す」は、共感を教えることが中心にあります。ワークショップの参加者は他のグループの痛みに同情の念を抱き、自分の苦しみの方が強いと見なしたい衝動を乗り越える力を養います。これによって参加者が解決しなければならないダブルバインドの状態が生まれます。目の前の人を嫌いながら、同時に共感を抱くことは、どうすればできるのだろうか。

五つ目のゴールは、苦しみに意味を見いだすことです。健康な人間は自らの人生に目的と意味を生み出す必要を感じます。これについて、ヴィクトール・フランクルは私に多大な影響を与えてきました。苦しみは偉大な師です。トラウマや恥、罪、恥辱が受け継がれても、大事なのはそこから意味を見いだすことです。これは心理的であると同時にスピリチュアルな課題です。ホロコーストや広島のように意味を見いだせないような出来事から、いかにして意味を見いだすことが可能でしょう。苦しみを自分のものにするには、奉仕や創造の行動が必要だと私は信じています。

4. 方法と技法

①文化間の葛藤解決におけるドラマセラピー

過去23年間対立するグループに関わってきた私は、何日ものワークショップの間に六つの段階が生じることに気づきました。これらの段階は、順番に起きるとは限りません。グループの安心感、文化的な影響、集団的トラウマからの感情的感覚的な距離によってグループプロセスの条件が変わるからです。

②プロセスの諸段階

最初の段階は、対立する文化を一緒にし、互いに話をするというタブー

を破ることです。接触することを避ける目に見えない壁があり、「敵」に話をするのは裏切りと見なされます。しかし、対立するグループがこのタブーを破って率直な対話に取り組むと、互いに対して抱いてきた様々な層をなす未解決の感情と取り組むようになります。他の人が歩む道を切り開く感情的なパイオニアとまずワークをします。

第二段階では互いに自らの物語を語ることで人間として向き合うことをします。対立する文化の構成員が互いの物語や痛み深く耳を傾けると、互いを大事に思うようになります。共感と友情の気持ちが、互いを嫌悪する歴史的な強制力よりも強くなります。

信頼が十分に育つと第三段階へと移行し、私たちすべての人の内にある潜在的な加害者の側面を探ります。和解のためには、状況によっては誰でもが残酷になる可能性をもっていることを認める必要があります。この真実を受け入れることは、互いを平等な立場へと導きます。

第四段階は、悲嘆へと深く入りこむことです。共に嘆き悲しみ互いが嘆くことを許すことは不可欠です。人は両親や祖父母や先祖の痛みを引き受けており、その痛みが十分に悲しまれるまで、こうした遺産が次世代へと引き継がれます。

第五段階では、統合と追憶の儀式とパフォーマンスの創造に向かいます。対立するグループが追悼の儀式やパフォーマンスを公私にわたって創造し、複雑で困難な歴史を共有していることを認めることで、人々が抱く感情を芸術的な形で表現する方法を提供します。公の場で発表することによって、和解の癒しの効果を社会へと拡大し、ワークショップに参加しなかった他者の人生や意識に触れることができます。

このプロセスの最後の段階は、ワークショップで達成した学びを世界へと広げ、創造と奉仕の行為に携わることです。創造とは、物語を分かち合ったり、詩や絵画や演劇を生み出すことで、過去の痛みを芸術の形に変容することです。もう一つの様式は、参加者のエネルギーを奉仕へと導くことです。例えば、政治的難民のために働いたり、レイプの被害者を助けるなど、不正を直し、償いをするのを助けることです。

私は1995年にアウシュビッツへの巡礼で自然の内に見いだした深い癒しと変容の原理を信頼してきました。焼き場の周囲に燃やされまき散らされた死体の灰がもたらす怖ろしさでさえ、この世を越えた美しい野草へと変容されうるのです。

私のワークの根底にある原理についてお話する機会を与えて頂き、感謝しています。平和教育についてのこの大切な対話を続けていくことを心から楽しみにしています。

(翻訳：村川治彦)

Armand Volkas (CIIS 准教授 ドラマセラピスト)

アウシュビッツからの生存者を両親にもち、ドラマセラピーの手法を使った独自の平和教育プログラムを開発。ドイツ人とユダヤ人、トルコ人とアルメニア人など様々な対立するグループの和解に取り組んでいる。